

現代大学生の対人関係意識とコミュニケーション

田川 隆博 (名古屋大学大学院)

1. 研究目的および調査概要

本研究の問題意識は、現代の多数の大学生が大学生活でもっとも重視するものとして「よい友人関係をつくること」と答えることに端を発している。一般の大学生にとっては「専門的な知識や技術を身につける」「いろいろな資格をとる」「留学などで見聞を深める」といったことにまして、よい友だちを見つけること、よい友人関係を構築することが重要視されているのである。本研究は、上記のように意識されているような現代日本における若者の友人関係について、特にコミュニケーション行動に注目しつつ、友人関係の特質を質問紙調査を通じて明らかにしようとするものである。

近年、若者は他人を傷つけない、自分が傷つくのが恐いために「マサツ回避」(千石、1994)したり、他人に過剰にコミットしない「やさしさ」(栗原、1981)をもっていたりするとしばしば指摘され、しかもそのような傾向は「～症候群」「～症」といった病いのメタファーで盛んにとらえられてきた。このような若者像に重ねられてきたイメージとは対人関係の遮断・自閉化とそれを代補するモノ・メディア・情報環境というものである。しかし、現代若者に見られるような他者との問題状況・摩擦の回避や、自己の内面・感情の過剰な表出を抑えることの意味ははたしてそのような病いのメタファーで語られているようなことなのだろうか。

以上のような問題意識から本報告では次のような分析を行っていく。まず、対人関係の遮断・自閉化傾向を検証するために、基本的な現代大学生の対人関係のあり様を概観する。次に、自分を抑えながら他者に関与していく摩擦回避の目的・意味について分析するための枠組みを提示し、それに基づいて分析を進める。

その際本報告で提示される視点は、あからさまな感情や気持ちの表出を抑えることは、対人関係が困難になっているという病理的メタファーでとらえられるものとしてでなく、対人関係を円滑に進めるために高度に発達したコミュニケーション・スキルととらえるというものである(本報告ではこれをくウォーム>な関係と表現している)。そのように洗練された「他者」という技法」(奥村、1998)をもつ人たちの特徴、自分を抑えながら他者に関与していくコミュニケーションのあり方の目的や意味を考察する。

本研究の分析において使用するデータは、1996年12月から1997年1月に実施した「現代大学生の生活と意識に関する調査」注1をもとにしている。サンプル数は864調査対象は7大学である。

2. 友人関係の分析枠組み

友人グループに関しての分析枠組みを提示する(図1)。友人グループに関しては、関係性の取り方、すなわち友人に対して自分の意見をはっきりと主張するか、人の立場を考えたり摩擦を回避しようと自分を抑えるかという軸と、集団への帰属意識や親密性の認知という軸を交差させて図1のようにまとめられる。I象限は、近年「マサツ回避」「やさしさ」などで表現されるような、他者に対しての過剰なコミットや問題状況などを積極的に回避しながら、親密さを維持している一群であり、本報告ではこれをくウォーム>な関係と呼ぶ。

IV象限はI象限同様、友人との親密な関係を認知しているながらも、たとえ相手との摩擦をとまなおうとも、相手に対して自分の主張を通しそうとするような、かつて若者の理想的コミュニケーションとして夢想されていたような古典的・伝統的な「熱い」コミュ

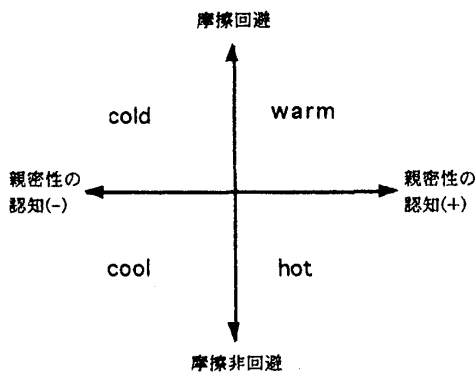


図1 友人関係の分析枠組み

ニケーションである。ここではこの類型を<ホット>な関係と呼ぶ。

III象限は摩擦を回避せず、しかもそのグループに親密さを感じていないような類型で、これを<クール>な関係と呼ぶ。例えば体育会の部活や自治会の仲間のように目的意識が強く、集団全体の利益のために積極的に自己主張を繰り広げるような集団が想起されるが、おそらくこのような一群は大学生の友人関係においてはあまりみられないだろう。

II象限は問題状況や摩擦を回避しようとする傾向に関しては<ウォーム>な関係と同様であるが、グループに対する親密さの認知に違いがある。この類型ではグループ内の友人に対しての親密さやグループへの帰属意識をあまり感じておらず、日常的な孤独を避けるために接しているような一群で、これを<コールド>な関係と呼ぶ。あまり性格が合わないと思っていたり、共有できるものをもっていないと感じながらも、キャンパス内でひとりぼっちになることを回避（サバイバル）するために、関係を保持・持続させているような一群である。

3. 結果：友人関係の性質とコミュニケーション状況

a. 友人関係の性質と親密さの認知

まず、頻繁なコミュニケーションを行っていたのは<ホット>と<ウォーム>な関係であり、<クール><コールド>な関係では総じてコミュニケーションの頻度は低くなっている。とりわけ自己の内面や感情を表す<表出型コミュニケーション>においてその差は明確であり、「他人のうわさ話をする」などの自分や

他者の内面への関与度の低い項目よりも、「悩み事を相談する」などの関与度の高い項目において、その差は顕著である。

よって、<表出型コミュニケーション>の方がお茶を飲んだり、一緒に遊んだりする<交流型コミュニケーション>に比べて、相手との親密性の認知が土台として重要だと考えられていると思われる。あまり親密だと思っていない相手に対して、相手の内面に踏み込んだり、自分の内面を相手にさらしたりすることは避けられるという傾向性が指摘できよう。そのような傾向性は、友人関係意識、自己意識、関係性の認知においても見られ、親密性の認知はグループへの帰属意識や他者とのコミットメントの密度の基盤となっているということを示唆している。

b. 友人関係の性質と摩擦回避

「自分の好みをはっきり主張する方だ」という項目では<ウォーム><クール>な関係に比べて、<ホット><コールド>な関係が高くなっている。これは<ホット>や<コールド>がたとえ問題を引き起こす可能性があろうと、自己を積極的に主張しようとする傾向を持つからであろう。ここで「ノリのあわない人とは友だちになれない」という項目に注目したい。この項目においても<ウォーム><クール>な関係より、<ホット><コールド>の方が高くなっている。このことが示唆しているのは次のような状況だろう。すなわち、たとえ「ノリがあわない」と思っているも、「合わせ」ようとしているということである。<ウォーム>な関係では「合わせる」ことによって親密さを高めようとし、<クール>な関係では「合わせる」というコストを払うことで、孤独を回避しようとしていると考えられる。（データの詳細は発表当日の配布資料にゆずる）。

*以下、高度なコミュニケーション・スキルとしての摩擦回避の目的や意味について考察を加えていく。

注1 本調査は、学生文化研究会（研究代表：酒井朗 お茶の水女子大学助教授）による共同調査である。